



feature interview

# DJ KOYA & HI-D

“HARLEM ver.2.0”で初コラボしたKOYA/HI-D。同じ年代という彼等、それぞれDJ、シンガーと立場は違えども、ハーレムをイメージして制作したというver.2.0収録曲“Shake ya head”は、現場主義である彼等の共通した想いが感じられる1曲である。HARLEMでは毎週火曜日RED ZONE、7/1 HI-D Release Live、そして今後この二人の新たな展開をしっかりチェックするべし。

■まずは“HARLEM ver.2.0”に収録されている“Shake ya head”について。

HI-D (以下、H)：最初にトラックを聴いた時、ちょっと新しいオレをやれたらいいなと思って、あえて自分の作品ではやってなかった所を、今回はまさにやれたかなという感じです。メロディーは思い浮かんだままをそのままたき台にして。

DJ KOYA (以下、K)：早かったよね。トラックを渡してから直ぐだったもんね。

H：最近クイック&レスポンスを目指してるので(笑)。

■上がってきたメロディーを聴いての感想は？

K：オレ的には言う事ナシですよ。

H：真横に居て聞くと照れるものがある…。

K & H：笑

■お二人の共同作業は今回の作品が初めてですか？

K：何から何まで初だね。

H：ちゃんと会うのも初。

K：でも年も一緒だし、音楽の趣味も近くて話しが早かった。音楽的にもそうだし、遊び場も、遊んできたヒストリーも一緒だったしね。

H：そうそう。カッコイイと思うツボが一緒だったり。だから制作も入っちゃったら早かったね。2番でこんなになったらいいよね、そうなんだよねみたいな。

K：一回お互いに持って帰ってというのは何回かあったけど、もう凄い『すんなり』だったよ。

H：まずこの二人の2ショットっていうのが凄い。

K：そうだね、あんまりないもんね。

H：近いラッパーの人に話をしたら「DJ KOYAとHI-D、踊らせそう〜」って言った。

K：そういう点では凄いな面白かった。これを機にまた次に膨らむ話しも出てきたし。

H：今回から繋がっていく話しがいっぱいあるから、今後皆さんご期待。もちろん二人だけじゃなく、いろんな人達を巻き込んで、楽しい話しになってきてるので、ここ数ヶ月で楽しそうな動きをやってるね、みたいなのは出てくるんじゃないかなと。

■“Shake ya head”の聴き所は？

K：『パーティのり』な1曲で、オレもかけていこうと思ってる、プレイの中で混ぜられる感じのパーティーチューンだね。みんなどう取るかわからないけど、オレ的にはそういう感じで作ったので踊って下さい。

H：音楽って環境だとオレは思ってる、今回はHARLEMのコンビっていうのもあるし、毎週回しているKOYA君のトラックでっていうのもあって、その環境はオレが参加する前からこの上なく出てるものがあったと思って、それにオレが持っているハーレムのイメージとか、オレが今まで見てきたり参加してきたハーレムのイメージを『ドンと加える』という意味合いを持って参加したので、オレの中ではこれ以上ないハーレムが、聴いた時にみんなの中で見えてきたらオレは嬉しいかな。音楽って耳で聴くもので目では見えないものかも知れないけど、耳で聴いた時にみんなの中で楽しいハーレムが浮かんできたらその部分が聴き所かな。そしてそこに接してきているこの二人のコラボっていうのも聴き所だね。

K：そうだね。オレ達はそういう感じで作ったけど、みんなはどうなの？って所だね。

H：リリックもそうだし音に関してもそうだけど「KOYA君のこの抜き所とか、このフックのトラックがオレとしてはハーレムっぽいな」とか、「HI-D君のこのリリックの所が、オレとしてはハーレムっぽかったっすね」とかなればもうそれが売り。欲を言えばどこかのイベントで、そういう風に言ってくれる人がいて、声かけてくれると非常に嬉しい。

■クラブがオリジナルのコンビレーションを出す事についてどう思われますか？

H：特に今回はDJ主体から始まる所があったから、マイク持ちのオレとしてはそのラインナップに加えてもらって凄いなと思った。自分のもの

を出すのとは明かに違うから。今回のコンビに入っていないDJとかラッパーとかも、凄くいいものを作って、カッコイイ事をやっているから、特にオレらがどうこうっていうのはないけど、今回縁があって参加出来るというチャンスをクラブ側が与えてくれているっていうのは凄い事だと思う。アメリカのクラブでもMIX CDとかはあるけどオリジナルってないもんね。

K：確かにないね。現場が出すんだもんね。現場が出すっていう事がオレは凄く意味がある事だと思う。

H：オレらは現場だから。現場から出ているアルバムって凄いな。今後自分が参加出来るようになってまいがそういう存在がずっとあってくれたらなってると思います。

■本誌初登場のHI-Dさんですが、読者への自己紹介を。

H：Def Jamから第五番目のアーティストとしてデビューするという事は分かっている人もあると思うけど、リリースは7月2日のMAXI SINGLEから。一昨年からの流れを言うと、BEATさんのフィーチャリングやYAS、DELI、DABO、TWIGYと続いて、オレは元ダンサーをやっていたからHIP HOPが好きで、その流れで歌をやっているっていうのがあるんだけど、そこら辺を出したくて。ライブを観てる人はメローなイメージがあるだろうけど、最初だから今までやって来た事をストレートに出したくて、今回はミドルは入ってるんだけどバラードは入ってなくて、割とアップが中心。プロデューサーはFIRSTKLASと、今回デビューする前からずっと一緒に作ってくれていた仲間、フィーチャリングもずっと話しをしたりして前に作品も作ったりしていたレゲエのMCのBUTCHER。今回は同じ年ばかりだよ。FIRSTKLASも二人とも同じ年だしBUTCHERもBUTCHERとやった曲のトラックメーカーも同じ年だったり。オレらの年、結構多いからね。

K：うん多いね。

H：そういうみんなの力を借りて頑張って参戦したいなと。

■歌はいつ頃から？

H：歌は20歳過ぎたからだね。それまではダンサーの活動が中心で、バックダンサーもやったりしてたので、歌の人の活動は前から興味があったんだけど機会がなくて、たまたま昔バンドをやっていた弟と一緒にボーカルグループを組んで「ちょっと歌ってみよう」みたいな話しが挙がって、アカペラやったりBOYZ II MENのカヴァーをやりながら、実は歌って踊ったりしてました。

■歌を始めるにあたり影響されたのはBOYZ II MEN？

H：オレはどちらかと言うとJODECIだったんだけど、ちゃんとトラックメイキングをやるヤツがいなくて、アカペラでやっていた曲があったのがBOYZ II MENで、そのカヴァーから始まった。淡い所と言うとトゥループの“SPREAD MY WINGS”かな。

K：懐かしいな。そういう話しを聞いても一緒だね。

■目指しているシンガーはいますか？

H：好きなアーティストはいっぱい居るけどね。ここ何年かで悪い意味じゃなくて名前が出るのはASHERだったりするんだけど、オレ的にはもう少し大人な感じにしていきたいし、強い挙げればGinuwineとか。大人な、でもエンターテイメントもバッチリで、最近特にHIP HOPな動きもしてるからある意味リアルタイムでリンクしてるなと思って。ちゃんと女性陣に向けてのメローな部分も持ってて、でも若い人には歌えないバラードも歌ってみたい。

K：HI-Dだったらバッチリ。負けず踊ったりしてエンターテイメントも備えてるっていう。

H：あまりこだわり過ぎずに新しい事をどんどんやっていけたらなって。そういう意味では今回の



HARLEMコンビの話は、また一つ新しい事が出来て、KOYA君とも知り合えて有り難い事だなと。話してみたら近い感覚があって、それも有り難い事だなと。

■最近のRED ZONEは？

K：最近あまり変わらずといういつものマイペースな感じで。お客さん的にはもう分かっていると思うけど、そういう感じでやっています。ずっと一貫して前のインタビューとかで言っているような事を常に追求している段階だし、今後もちろん色々な曲をかけていくし。何年かやってるうちに、これはいくらやってもウケないものとか、そういうのは出てきたりするだろうけど、そういうのも考えつつ、みんなが楽しめるような他ジャンルの音楽も色々かけていきたいと思っています。

■具体的な制作活動予定は？

K：aileとか、DABO、M.O.S.A.D.とかそこら辺の絡みのヤツ、今終わっているのはその位ですね。またHI-Dとやったり、今確実に決まっているものはそんなにないけど、どんどんやっていこうと思っています。

■最近ハマってる事は？

K：言うまでもなくスニーカーもそうだし…。  
H：その辺はB-BOYとしてももちろん常にハマってる事ですよ。

K：レコードも常にだしな。でも最近は制作が今までになくずっと続いてて、そういう制作とかについてちょっとハマってきたかな。今まで現場現場でずっと言っていたけど、前よりは制作がちょっと面白くなってきたかな。もちろん現場は今でも凄く大事だけど。

■お二人が考える良いHIP HOPの条件は？

K：もちろん黒さは絶対に意識の中に入れてるだろうね。トラックもオリジナリティって言われるけど、どこか意識する部分で作る時自分の中でまだ持つから、ホントに自分のオリジナリティを持てるようになったら本物かなって思う。

H：あとは、人に与える影響力みたいな所かな。別世界ではなくて近い所での影響力がHIP HOPの凄さで、他のジャンルには無い位近い所での影響力が強い音楽だよな。日本で言うところフォークみたいに凄く身近な所を歌ってるジャンルはあるけど、外から入ってきたもので言えば一番身近な影響力が強いのがHIP HOPかなって思ってる。

■ALL TIME FAVORITEは？

H：その辺は挙げるそとキリがないから。でもオレ的には未だにBOBBY BROWNはカッコイイなと思ったり。JA RULEとコラボした時も、まあ帰って来たって思ったし。確かに賛否両論、色々

あるじゃん。どっちかって言うバッシングされてる事の方が多かったりするかも知れないけど、オレ的には好きなソロのアーティストとしては歌って踊ってラップしてみたいな所だったりするんだよね。かなりセンセーショナルだったもん。

K：BOBBY BROWNが出てきた時って全てが入ってたもんね。

H：そうでしょ。ダンスも歌もラップもして、でもエンターテイナーとしてやっぱり格好良かったから。

K：あの当時のNEWスタイルだったよね。

H：ファッションもね。確かに年をとって変わった部分もあるかも知れないけど、ずっとオレの中でクラシックで、ずっと好きなアーティストの一人かも知れない。

K：オレはベタだけど、Biggie、JAY-Zは結局ここ何年か自分のプレイとか見てて、そこは消えないんだよね。もちろん新しいのはどんどん入ってくるけど、やっぱりそこかな。

■6周年について。

K：凄いな面白かった。

H：オレはLIVEが二番目で、レーベルメイトのSPHERE of INFLUENCEの後っていう事もあって、もう一つ別の気合いも入ったんだけど、やっぱりあれだけ雰囲気あってパワーがあるのは凄いなって思った。この御世で6周年って凄い事だし、やっぱり世代関係なく常に進化してって、みんなの共通の話題になるのはいい事だと思うし、そういう場があるだけでもオレらは有り難いし、ハーレムに来ているみんなのエネルギーも凄いから、そこを一番分かって易く感じられたよね、6周年は。楽しかった。

K：そうだね、6周年とか大晦日ってそういう部分を感じられやすいね。自分のにはそんなに変わってやっただけでもないけど、お客さんもいつもの火曜日のお客さんとは違って、色々な人が混ざってるから、盛り上がる曲は盛り上がる曲でそんなに変わらないけど、ツボは多少は違うのかなって思ったり。でもお祭りだから。いつもの感覚とはちょっと違う感覚でやったと思う。

■読者に一言。

K：“Shake ya head”を聴いてくれて事と、火曜日今後よろしくね。

H：オレらは曲を作る事で参加したり、イベントに出たりして参加してるけど、みんなはイベントに来てくれたりCDを買って聴いてくれたり、いろんな参加の仕方があるから、みんなの出来る方法で参加してくれたらいいかな。☺